

もう一度！ 近現代史(1)

「満州某重大事件 張作霖を爆殺した関東軍のどす黒い目的」

関口宏、保阪正康のもう一度！ 近現代史(1)



関口 宏, 保阪 正康

プロフィール

BS-TBSの人気番組の書籍化第二弾！ 新興国・日本が経済力と軍事力に自信を深め、欧米列強に伍する新たな一等国として成り上がろうとした、野望の時代、大正～昭和11年初頭までを描く書籍、『[関口宏・保阪正康のもう一度！ 近現代史 戦争の時代へ](#)』から注目の章をピックアップしてお届けします。

満州某重大事件 張作霖を爆殺した関東軍のどす黒い目的

昭和3（1928）年6月4日

軍閥トップ・張作霖を乗せた列車が奉天郊外で爆発。この爆殺事件の首謀者は日本軍の河本大作大佐と判明するが、河本はむしろ英雄視される。

保阪 張作霖は、息子の張学良や側近に対して、「自分は中国の歴史のなかで漢奸と言われる存在になりたくない」と話したと言い



ます。

関口 要するに漢民族に対する裏切り者ですね。

保阪 漢奸という言葉は、中国で一番不名誉な汚名です。日本の田中義一内閣は、張作霖を利用しながら日本が満州の権益を握り、運営していこうと考えていました。

関口 いっぽう関東軍の思惑は、張作霖を失脚させてその軍隊を潰してしまい、関東軍が直接満州を統治しようというものでした。その関東軍のなかで、河本大作という大佐が過激な意見を述べるようになります。

「満州における激しい反日運動は張作霖が意図したものであって、張作霖を抹殺すればこと足りる」というのですね。

保阪 河本大作が書き残したものを読み、その発言を検証すると、関東軍が満州を直接支配するために、張作霖は邪魔者だ、というんです。満州を軍事的な空白地帯にし、そこに日本軍が入っていくと。

張作霖の軍隊には軍事顧問として日本の軍人が送り込まれていましたが、こういう顧問団の軍人の動きが、背景に見え隠れするんです。ですから張作霖爆殺事件の首謀者はもちろん河本大作ですけれども、その背後に、日本陸軍の総意があると見なければいけないと思います。

関口 6月4日の深夜0時55分、張作霖が特別列車で日本の軍事顧問とともに北京を離れると、それを知らせる暗号電報が流れています。さらに列車が進むにつれ、山海関などの要衝を通過したことを偵察者が逐次電報報告している。そして早朝5時30分、奉天の手前に差し掛かったときに爆発が起こります。

爆発直後、張作霖はまだ息があったそうですが、いち早く駆けつけた夫人と側近が奉天の邸宅に運び、「命に別状なし」と言って容態について箱口令を敷いたと。しかし、その後張作霖は亡くなっています。

保阪 張作霖が生きていたら、その意思を確認する必要がありますし、関東軍としても動きを止めざるを得ませんでした。

関口 首謀者の河本大作大佐は爆破事件の「犯人役」まで用意していた。対立する蒋介石軍の仕業と見せかける偽装工作をしたんですね。事件を伝える朝日新聞にも、「南軍（蒋介石軍）の便衣隊 張作霖氏の列車を爆破」と書いています。便衣隊というのはゲリラのことですね。

「これが漏れると国際的に日本軍の威信に傷がつく」

保阪 張作霖爆破事件を調べる秘密委員会の資料を読むと、はじめはどうも南軍の便衣隊がやったようだという報告なんですが、外務省がそれを否定して、軍部が関与していることは様々な情報で確認されていると言うんです。軍部はしぶしぶそれを認めるんですが、「これが漏れると国際的に日本軍の威信に傷がつく」と主張するようになるんです。

この事件についてはコミンテルンなどによる謀略説もありましたが、日本政府の委員会ではっきりこのようなやり取りが記録されているので、疑う余地はないんです。



関口 そして、蒋介石が北京に入ります。無血入城ですね。一方張作霖の軍隊は、息子の張学良が引き継ぐことになりました。

保阪 関東軍の軍人たちは張学良を取り込もうと工作しますが、張学良は自分の父親が日本軍に殺されたことを知っていますから。満州全域に国民党の青天白日旗を掲げるかどうか注目されていましたが、張学良はためらうことなく掲げるんです。日本ではなく、国民党の側にいるという意思表示でした。

関口 田中義一首相も事件後、はじめから関東軍の仕業ということはわかっていたんでしょうね。

保阪 中国に駐在している外交官が本省に電報を打ち、関東軍によるものであることはどうも間違いないと情報を入れています。

関口 一方中国側の調査で、現場には日本側が敷設した爆弾の導線の跡が残されていた。爆弾自体も、蒋介石軍の便衣隊では到底扱えないほどの量だったことから、関東軍によるものと推察されたんですね。

こうした事実が次々に明らかになり、事件の2ヵ月後には、海外メディアも関東軍によるものである可能性が濃厚と報じるようになります。

保阪 犯人役に仕立てる経緯もひどいもので、阿片中毒の人間を3人連れてきて、数日の間ご馳走するんです。しかし、そのうちの一人が、なぜ日本軍が我々をこんなに歓待するのか、おかしいと気づいて脱走し、国民党の側に行って告発するんです。残った二人は事件現場に連れて行かれ、そこで日本の軍人に刺殺された。いかにも爆破犯のように仕立てて、殺してしまうんです。はじめから犯人に仕立て上げようと考えた、どす黒い計画です。

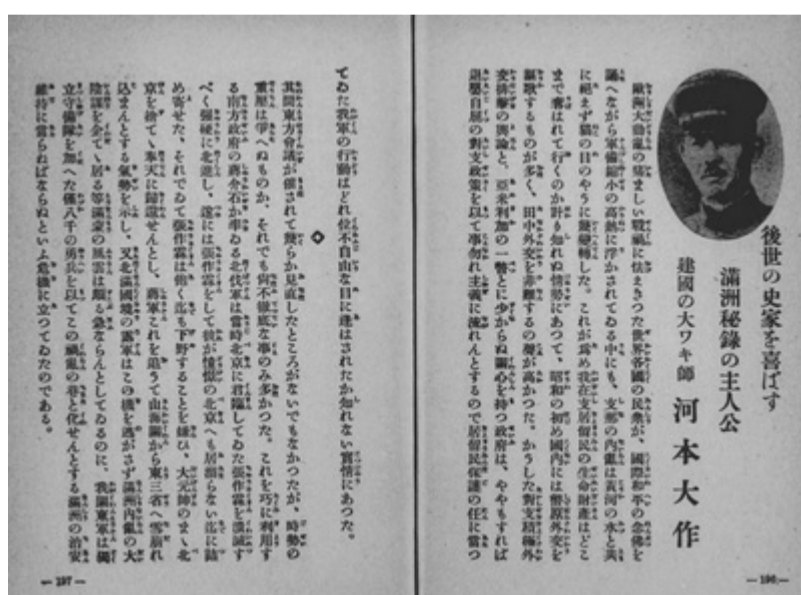
関連記事 関口宏さんと保阪正康さんの絶妙コンビが、日本史への苦手意識…

「河本さん、よくやった」

関口 こうした海外の報道もあり、田中首相は真相の公表と責任者を軍法会議にかけ、処分することを決意し、天皇にその旨を上奏しますが、これに対して陸軍が猛反発します。その論理は、「**陸軍の非を天下にさらすことは威信に関わる**」からというのです。

保阪 陸軍は、「**軍がやったということになれば政府も立場が悪くなる**」と言って脅した。

本来、田中総理は国として事件を公表し、報告書を書かなければいけなかったのに、陸軍の力を恐れてそれをしませんでした。



関口 田中首相は陸軍を処分するどころか、報道規制を敷いています。張作霖爆殺事件と言わず、満州某重大事件と報じられるようになる。元老の西園寺公望公や、野党が政府を追及しますが、結局河本大作大佐を嚴重処分せず、停職処分ですませました。

保阪 本来ならテロによる暗殺ですから、軍法会議にかけ、死刑に相当してもおかしくないと思います。しかし陸軍参謀本部の中堅幕僚たちが、河本支援に回るんです。私の調べた範囲ですが、河本がその後、東京に戻ったとき、**のちの総理大臣の東条英機が、「河本さん、よくやった」と言って、握手している。**それが当時の軍人たちの共通理解でした。河本は軍の中ではむしろ、英雄視されるんです。

関口 その後この河本という人はどうなったんですか。

保阪 事件のあと、軍を離れますが、満州で関東軍の意を受けた会社の社長を務めたりして、財政的に関東軍を支えるような役割を果たしています。